紙芝居と絵本の活用と再評価

――「街の朗読屋さん」の視点から――

林　　伸　一

１．はじめに～紙芝居の歴史～

まず、紙芝居の歴史を石山（2008）は『紙芝居文化史―資料で読み解く紙芝居の歴史―』で詳細に示しているが、田中（2018）は次のように簡潔に整理している。

紙芝居は、1929年の世界恐慌の時期に、失業者たちが版元から借りて、仕入れた駄菓子と一緒に自転車に積んで、子どもたちの集まる公園や街角にやってきて演じたのが始まりとされている。つまり、紙芝居は日本独自の文化的装置であると言える。

紙芝居のおじさんが、拍子木を打ち鳴らして「さあ、紙芝居が始まるよ」といって、自転車の荷台に据え付けた舞台に入った十数枚の絵を抜きながら、『黄金バット』などの作品を演じている姿があった。

今ではほとんど見られなくなったが、このような紙芝居は「街頭紙芝居」と呼ばれている。この紙芝居を見ることができるのは、おじさんの売っている水あめなどの駄菓子を買った子だけ、というのが原則であった。

しかし、絵のどぎつさ、非教育的な内容への教育関係者からの非難もあり、職業として演じられる「街頭紙芝居」とは違った、教育的な利用を目的として印刷された「教育紙芝居」が1935年ごろから活発になってきた。「教材紙芝居」とも言われる。そこには、キリスト教や仏教の布教、幼稚園や保育所、あるいは校外教育に広く導入された流れがある。

紙芝居を間にして演じ手と観客が向かい合い、場と時間を共有することによる心の交流は、素晴らしい共感を生み出し、その作品を理解し楽しむことができる。「街頭紙芝居」は観客をひきつけ、「教育紙芝居」はさらに教育効果も発揮するという特性がある。

このような紙芝居の用途は、戦意高揚のために1938年の国家総動員法公布を境に、国策に傾いたものに変えられていった。検閲制度も厳しくなる中、教育紙芝居のテーマも「貯蓄奨励」「倹約」など国家総動員に沿ったものになり、戦況が激しくなると『敵だ！倒すぞ米英を』『空の軍神 加藤少将』『神兵と母』といった、子どもたちを戦争へと駆り立てる「国策紙芝居」作品が次々と登場してきた。

「国策紙芝居」は、戦意高揚のために農村の隅々まで広く深く、日本中に普及して戦争協力してきたことで、東京裁判においても戦争責任が問われ、戦後復活した「街

頭紙芝居」もGHQの検閲対象となるほどであった。

紙芝居の「負の歴史」を踏まえて、紙芝居関係者は「二度と戦争をしないために役立つことを」との思いで、平和で、人間の生命を大切にし、子どもを愛することを原点とする紙芝居づくりを求めて、現在の紙芝居が生み出された。

（田中正美「日本発の紙芝居の歴史、そして世界へ」参照
http://www.keguanjp.com/kgjp_jiaoyu/imgs/2018/07/20180710_2.pdf）

以上のような紙芝居の歴史を紙芝居文化の会（2017）『紙芝居百科』（童心社）の「紙芝居 歴史年表」を参考にして、以下表1と表2のようにまとめてみた。なお、縦書きの年表を横書きにする、表1と表2に分けるなど表示のしかたには、手を加えている。

表１．紙芝居の流れ　1930（昭和5）年～1970（昭和45）年

	年代	紙芝居の歴史（主な作品）	世界と日本の動き
誕生のころ	1930	日本人の手により、手描きの街頭紙芝居として紙芝居が誕生した。「街頭紙芝居」は、駄菓子を売るための人集めの道具だった。	1930世界大恐慌により、失業者が街にあふれる 1931日本が中国、アジアへの侵略戦争を開始 1932ドイツでナチスが結成される
	1933	キリスト教紙芝居（ノアの洪水物語）幼稚園紙芝居（赤ヅキンチャン）教材紙芝居（教育紙芝居）などの紙芝居出版が始まる	1937　南京大虐殺
暗雲がおおう	1938	松永健哉らが「日本教育紙芝居協会」を設立（オサルノラッパ、うづら、芭蕉、蜘蛛の糸、キツネノゲントウ、太郎熊・次郎熊、コトリノユメ）	1938　国家総動員法発令 1939　ドイツ軍がポーランドに侵攻　第二次世界大戦へ
	1941	戦争宣伝のための紙芝居出版が、国策としてさかんに行われるようになる。 「日本教育画劇株式会社」が設立され、戦争賛美のための紙芝居が大量に印刷される。（軍神の母、爪文字、玉砕軍神部隊）	1941　日本軍がハワイ真珠湾を攻撃
	1943	出版される紙芝居はすべて戦意高揚のための国策紙芝居となり、70万～80万部発行された。	1945　日本降伏
文化運動の中で	1946	敗戦による経済混乱の中で街頭紙芝居が復活。	1947　日本国憲法施行
	1948	戦後の文化運動の中で教育紙芝居出版始まる。「民主紙芝居人集団」創立。 （平和のちかい、おかあさんのはなし、ぶたのいつつご、○と□と△ちゃん）	1955　第一回原水爆禁止世界大会が開かれる
	1957	紙芝居の出版社として童心社が創立される。 出版紙芝居作品の流れがつくられる。	
	1960前後	テレビの出現と普及により街頭紙芝居が衰退。 （天人のはごろも、おうさまさぶちゃん、おとうさん）	1960　日米安全保障条約改定阻止に約580万人が参加
	1960	公共図書館での出版紙芝居の貸し出し始まる。	

	1962	紙芝居の「五山賞」が制定される。	1964　米国によるベトナム戦争が始まる 1975　ベトナム戦争が終わる
	1970前後	国内での絵本の出版が盛んになる。市民活動の中で多数の紙芝居サークルが生まれる。（あひるのおうさま、たべられたやまんば、ロボット・カミイ、てんとうむしのテム、ひよこちゃん…）	

表２．紙芝居の理論の発展と広がり　1983（昭和58）年～2012（平成24）年

理論の発展と広がり	1983	「おおきくおおきくおおきくなあれ」五山賞	
	1991	ベトナムでの紙芝居講座が始まる。	
	1998	初めての紙芝居の理論書『紙芝居－共感のよろこび』が刊行される。	
	1999	「出前紙芝居大学」が始まる。	
	2001	「紙芝居文化の会」が誕生。ドイツ・スイス・フランスなどで紙芝居講座開催。世代をこえて様々な場で、紙芝居が演じられるようになる。	2001　米国で同時多発テロ 2003　イラク戦争
	2012	ヨーロッパ紙芝居会議「平和のために紙芝居を」が開催される。	2011　東日本大震災・原発事故起きる

表２に示されたように1980年代から、紙芝居についての理論書や解説書が出版されるようになった。紙芝居という日本独特の文化的背景から、日本国内でのみ演じられていたものが、ベトナムやヨーロッパでも演じられるようになった。

表１の中の紙芝居の「五山賞」の制定が特筆すべき点だと思われるので、以下に詳細を示す。

２．代表的な作品：高橋五山賞（たかはしござんしょう）

教育紙芝居の生みの親、高橋五山氏の業績を記念して、1961年に創設された。単に、「五山賞」ともいう。年間に出版された紙芝居の中から最も優秀な作品に贈られる。高橋五山賞審査委員会（財団法人文民教育協会子どもの文化研究所）が主催して、以下のように1962年の第1回より年々回を重ね、第56回（2017年）に至っている。

なお、56回中9回該当作なしの年があったものの同年に複数の受賞作があった場合もあり、2017年までに78作品が何らかの形で受賞している。約半世紀における紙芝居の代表作と言ってもいいであろう。

第１回から第10回　1962（昭和37）年～1971（昭和46）年

第１回（1962年）－「池にうかんだびわ」（作家賞/川崎大治、画家賞/小谷野半二）

第２回（1963年）－「つきよとめがね」（脚色賞/堀尾青史、画家賞/遠藤てるよ）

第３回（1964年）－画家賞:「ななみちゃんのえにっき」（櫻井誠）、画家賞:「とらっ

くとらすけ」（北田卓史）

第４回（1965年）－作家賞：「しごとのにおい」（与田準一）、画家賞：「いなむらの火」（福田庄助）

第５回（1966年）－「しわしわの手」（作家賞／有賀のぶ、川田百合子、画家賞/井口文秀）、「宮沢賢治童話名作集」（作家賞/堀尾青史、画家賞/滝平二郎）

第６回（1967年）－「おおきなだいこん」（作家賞/川崎大治、画家賞/鈴木寿雄）

第７回（1968年）－「あげはのルン」（作家賞・画家賞得田之久）、画家賞：「おとうさん」（田畑精一）

第８回（1969年）－「天人のよめさま」（作家賞/松谷みよ子、画家賞/中尾彰）

第９回（1970年）－「こねこちゃん」（作家賞/堀尾青史、画家賞/安泰）

第10回（1971年）－作家賞：「どこへいくのかな」（堀尾青史）、画家賞：「たべられたやまんば」（二俣五郎）

⁂第4回（1965年）画家賞受賞の「いなむらの火」は1854年（嘉永7年/安政元年）の安政南海地震津波に際しての出来事をもとにした物語である。地震後の津波への警戒と早期避難の重要性、人命救助のための犠牲的精神の発揮を説いている。小泉八雲の英語による作品を、中井常蔵が翻訳･再話したもので、文部省の教材公募に入選し、1937年から10年間、国定国語教科書（国語読本）に掲載された。防災教材として高く評価されている。もとになったのは紀伊国広村（現在の和歌山県有田郡広川町）での出来事で、主人公・五兵衛のモデルは濱口儀兵衛（梧陵）であるとされている。東北大震災後再評価されている作品である。

＜https://ja.wikipedia.org/wiki/「稲むらの火」（参照）＞

第11回から第20回　1972（昭和47）年～1981（昭和56）年

第11回（1972年）－画家賞：「ちいさなきかんしゃ」（津田光郎）、画家賞：「どっちがたかい」（池田仙三郎）

第12回（1973年）－該当作なし

第13回（1974年）－「ねことごむまり」（作家賞/与田準一、画家賞/安泰）、集団作品賞：「ケーキだ　ほいほい」（指導/堀尾青史、画家賞/久保雅勇）

第14回（1975年）－「うまいものやま」（作家賞/佐々木悦、画家賞/箕田源二郎）、

奨励賞・作家賞：「はっぱであそぼう」（川島美子）

第15回（1976年）－作家賞：「どうぞのいす」（香山美子）、画家賞：「どうぶつやまのクリスマス」（久保雅勇）

第16回（1977年）－奨励賞･作家賞:「しょくどうは８かい」（上地ちづ子）、奨励賞･作家賞:「ひなのやまかご」（古山広子）、奨励賞・画家賞：「あてっこあてっこ」「においのおねだん」（和歌山静子）

第17回（1978年）－奨励賞・画家賞：「おおえやまのおに」（須々木博）

第18回（1979年）－奨励賞・画家賞：「はっぱのぼうけん」（月田孝吉）

第19回（1980年）－「くじらのしま」（作家賞/堀尾青史、画家賞/穂積肇）、画家賞：「たなばたものがたり」（三谷靭彦）

第20回（1981年）－画家賞：「つんぶくだるま」（金沢佑光）、奨励賞・画家賞：「にじになったきつね」（藤田勝治）

⁂第15回（1976年）の作家賞「どうぞのいす」（香山美子）に関しては、教育画劇から紙芝居（画・岩本圭永子）として出版された。しかし、現時点（2018年現在）では、絵本としては見ることができるが、紙芝居はなかなか見られない。紙芝居と絵本では、画家が異なるために主人公のうさぎの描かれ方も異なる。「どうぞのいす」（大型絵本）が2005年チャイルド本社から出版されているため、紙芝居のようにして上演できる。「思いやり」を育てる絵本として定評があり、幼稚園などで劇として演じられることがある。

第21回から第30回　1982（昭和57）年～1991（平成3）年

第21回（1982年）－特別賞：小林純一、奨励賞：「おおきなぼうし」（木曽秀夫）

第22回（1983年）－「おおきく　おおきく　おおきくなあれ」（作家賞・画家賞まついのりこ）、奨励賞・画家賞：「ころころこぐま」（安和子）、特別賞：「おじいさんのできること」（ときわひろみ）

第23回（1984年）－作家賞：「おひゃくしょうとめうし」（松野正子）、画家賞：「くちのあかないカバ　ヒポポくん」（田畑精一）、画家賞：「かぜのかみとこども」（若山憲）

第24回（1985年）－特別賞：右手和子、特別賞：加古里子

第25回（1986年）－「よさくどんのおよめさん」（作家賞/秋元美奈子、画家賞/水

野二郎)、「シュークリームのおきゃくさま」(作家賞/西村彼呂子、画家賞/アリマジュンコ)、特別賞:「あかふんせんせい」「いわつばめとおぜのおじさん」などにより(渡辺享子)

第26回(1987年)－該当作なし

第27回(1988年)－「だれかさんてだあれ」(作家賞/香山美子、画家賞/安和子)、画家賞:「嘉代子ざくら」(井口文秀)

第28回(1989年)－脚本賞:「がんばれ!勇くん」(上地ちづ子)

第29回(1990年)－奨励賞:「ニャーオン」(脚本/都丸つや子、画/渡辺享子)

第30回(1991年)－五山賞:「ゲンじいとかっぱ」(脚本/平方浩介、画/福田庄助)、五山賞絵画賞:「ニルスのふしぎなたび」(油野誠一)、奨励賞:「ぼくのきもち」(脚本/三好富美子、画/藤本四郎)

第31回から第40回　1992(平成4)年～2001(平成13)年

第31回(1992年)－五山賞:「なめとこ山のくま」(原作/宮澤賢治、脚本・画/諸橋精光)、五山賞絵画賞:「ざしきわらし」(画/篠崎三朗)

第32回(1993年)－五山賞:「ふうたのはなまつり」(原作/あまんきみこ、脚本/水谷章三、画/梅田俊作)

第33回(1994年)－該当作なし

第34回(1995年)－奨励賞:「どうぶつのてんきよほう」(脚本/杉浦宏、画/やべみつのり)

第35回(1996年)－奨励賞:「太陽はどこからでるの」(チョン・ヒエウ)

チョン・ヒエウ(脚本・絵)の作品は、ベトナムの紙芝居とされている。「太陽はどこから出てくるのかな?　カニは海から、シカは山から、サルは木の上からと、いつも自分がいるところから見えることをいうけれど、みんなバラバラでよくわかりません。本当のことを知りたくて…。」(大型本－1996/9/1童心社発行)

第36回(1997年)－奨励賞・脚本賞:「どんぐりのあかちゃん」(島本一男)

第37回(1998年)－該当作なし

第38回(1999年)－審査委員会推薦賞:「ねんね　ねんね」(画/いそみゆき)、審査委員会推薦賞:「ふしぎなしっぽのかなへびくん」(画/小林ひろみ)

第39回（2000年）－審査委員会推薦賞：「すてきなおにいさん」（脚本/古山広子、画/藤本四郎）

第40回（2001年）－五山賞：「トラのおんがえし」（渡辺享子）、五山賞：「おかあさんまだかな」（福田岩緒）、五山賞絵画賞：「なぜ　おふろにしょうぶをいれるの？」（伊藤秀男）

第41回から第50回　2002（平成14）年～2011（平成23）年

第41回（2002年）－該当作なし

第42回（2003年）－五山賞：「かあさんのイコカ」（降矢洋子）

第43回（2004年）－五山賞：「てつだいねこ」（脚本/水谷章三、画/大和田美鈴）、五山賞特別賞：「とまがしま」（田島征三）、五山賞奨励賞・絵画賞：「うぐいすのホー」（松成真理子）

第44回（2005年）－該当作なし

第45回（2006年）－五山賞：「おじいさんといぬ」（藤田勝治）、五山賞：「のーびたのびた」（福田岩緒）

第46回（2007年）－該当作なし

第47回（2008年）－該当作なし

第48回（2009年）－五山賞奨励賞：「やさしいものバッパー」（降矢奈々）

第49回（2010年）－五山賞特別賞：「アリとバッタとカワセミ」（イ・スジン）

第50回（2011年）－五山賞：「りゅうぐうのくろねこ」（イ・スジン）

『アリとバッタとカワセミ』は、韓国の昔話で、アリの腰が細くて、バッタの頭に髪の毛がないわけや、カワセミのくちばしが長い理由はなぜかが描かれた由来話。作者のイ・スジンは、韓国ソウルで、ソウル市立大学イラストレーション大学院に在学中に、この作品を製作し、五山賞特別賞を受賞し、日本でのデビューを果たした。

アジアのむかしばなし『りゅうぐうのくろねこ』もイ・スジン（脚本・絵）の作品で、「むかし、ヤイという女の人がいました。木を売るのが仕事でしたが、毎日あまり売れません。ヤイは、だれかの役に立つことをねがい、のこった木を海辺へおいていきまし

た。すると数日後、目の前に魚があらわれました。竜宮に招待されたヤイは、ふしぎなくろねこをもらって…」と童心社によって紹介されている。

日本独特の文化とされる紙芝居が外国人の手によって製作され五山賞特別賞や五山賞を獲得しているというのは、紙芝居の海外への広がりという点で、「太陽はどこからでるの」（チョン・ヒエウ）と並んで特筆されることであろう。

第51回から第60回　2012（平成24）年～2017（平成29）年

第51回（2012年）－該当作なし

第52回（2013年）－五山賞：「みみをすませて」（和歌山静子）

第53回（2014年）－五山賞：「ごん助じいさまとえんま大王」（作/わしおとしこ、絵/伊野孝行）、五山賞脚本賞：「きつねの盆おどり」（ときわひろみ）

第54回（2015年）－五山賞：「カヤネズミのおかあさん」（脚本/キム・ファン、絵/福田岩緒）

第55回（2016年）－五山賞奨励賞：「おひるねですよ」（作/内田麟太郎、絵/市居みか）

第56回（2017年）－五山賞：「ぞうさんきかんしゃ　ぽっぽっぽっ」（とよたかずひこ）

（以上ウィキペディア参照：https://ja.wikipedia.org/wiki/高橋五山賞 ** は筆者による注）

３．「こころが温まる朗読の世界」➡「街の朗読屋さん」➡「山口の朗読屋さん」

2016年に山口市の「やまぐちカルチャーセンター」で「こころが温まる朗読の世界」という講座名でスタートした朗読教室が、2017年には「街の朗読屋さん」と改名し、さらに老人施設やイベントなどへ訪問上演するようになり、2018年から対外的には「山口の朗読屋さん」として活動を拡大・発展させてきた過程を以下に開示したい。

＜2016年（平成28年）＞

2016年4月から「やまぐちカルチャーセンター」（YCC）の朗読教室として「こころが温まる朗読の世界」という講座が始まった。受講生７名の小さな講座であったが、開講した4月には、中原中也記念館前の「空の下の朗読会」に4名が参加して、詩の朗読を行っている。

同年7月25日にはYCCで発表会を行い、金子みすゞの詩やレオ・レオニの『フレデリック』、紙芝居の『ももたろう』、佐野洋子『おじさんのかさ』（絵本）、景祥明『しあわせってなあに？』（絵本）などを朗読した。紙芝居や絵本というと子供向けの内容と思われがちであるが、大人の心にも響くものであることを示す機会となった。

同年9月には、朗読教室の課外授業として、山口県長門市の香月泰男美術館・金子みすゞ記念館・村田清風記念館・くじら資料館をめぐる日帰り旅行を企画し、3名が参加した。

同年10月17日に「やまぐちカルチャーセンター」で「紙芝居で味わう昔話の世界」を企画し、外部の人も招待し「月のうさぎ」「つるのおんがえし」「ふるやのもり」「豆っ子太郎」「金色夜叉」などの紙芝居を会員5名が上演した。

同年10月30日には、美祢の真長田八幡宮の秋の例大祭に「こころが温まる朗読の世界」から出前の紙芝居の上演を5名で行なった。

＜2017年（平成29年）＞

2017年2月20日には、「中原中也の詩を味わってみよう！」と題する朗読会を「やまぐちカルチャーセンター」で行った。中原中也記念館館長の中原豊氏をお招きし、パワーポイントで大きく映し出された中也の詩を会員7名が朗読した。朗読には、その場の即興でChifumi上利千冨美さんによるハープの伴奏がついた。

同年4月からは、「やまぐちカルチャーセンター」の朗読教室の講座名を「街の朗読屋さん」に改めた。それはNHKのBSで放送された「朗読屋」に影響されたこともある。

同年4月29日には、中原中也記念館前の「空の下の朗読会」に参加して、詩の朗読を行った。

同年7月8日には、山口大学の七夕祭で「原爆と戦争展」の一環として「紙芝居で伝える戦争体験」を実施した。「のばら」「平和のちかい」「峠の老い桜」などの紙芝居や峠三吉、礒永英雄の詩の朗読を5名で行った。

同年7月17日には、平川地域交流センターにて「原爆と戦争展」の一環として「紙芝居で伝える戦争体験」を実施した。「のばら」「平和のちかい」「峠の老い桜」などの紙芝居や峠三吉、礒永英雄の詩の朗読を4名で行った。

同年7月31日には、「やまぐちカルチャーセンター」にて「紙芝居で伝える戦争体験」の発表会を実施した。「のばら」「平和のちかい」「峠の老い桜」「父のかお　母のかお」「いきるちから」などの紙芝居を4名で朗読した。NHKの取材を受け、一部が放送された。

同年9月13日には、下松老人福祉会館での「玉鶴老人大学講座」に招かれて、紙芝居「愛染かつら」「よだかの星」「眼鏡屋と泥棒」を4人で分担して上演した。

同年11月には、ハートホーム平川への第1回目の訪問公演を行った。紙芝居「愛染かつら」「よだかの星」「眼鏡屋と泥棒」を6人で分担して上演した。

同年12月14日にジャススポットポルシェで行われた第3回「やまぐち朗読カフェ」に初参加した。紙芝居「蜘蛛の糸」「かさじぞう」を上演し、詩の朗読をした。

同年12月23日には、「ギャラリーカフェつるかめ」（山口市後河原219、元武家屋敷の古民家、築180年以上）でのクリスマス会に「街の朗読屋さん」から3名参加し、紙芝居「愛染かつら」「おむすびころりん」「はなさかじじい」などを上演した。

＜2018年（平成30年）＞

2018年1月21日には、山口市男女共同参画センターにて行われた「新春のつどい」に参加し、紙芝居「平和のちかい」を上演した。

同月1月22日には、ハートホーム平川にて第2回目の訪問公演として、日本の昔話の紙芝居を1時間(2時～3時)行った。「かさじぞう」「はなさかじじい」「ももたろう」「おむすびころりん」「かぐやひめ」の五本の紙芝居を5人で分担して演じた。

同年2月22日にジャススポットポルシェで行われた第4回「やまぐち朗読カフェ」に参加し、朗読した。

同年3月5日には、「やまぐちカルチャーセンター」にて「街の朗読屋さん発表会」を行った。詩集『そこに光があるから』の著者北川暢子氏を招いて、会員6名が詩集の中の詩をそれぞれ朗読するという内容で、Chifumiさんのハープによる即興伴奏と演奏が花を添えた。卒業生二人の朗読も加わった。当日は、宇部日報の取材を受け、3月7日付で写真入り記事が掲載された。

同年3月26日には、ハートホーム平川にて第3回目の訪問公演を行った。

同年4月11日のジャズスポットポルシェで行われた第5回「やまぐち朗読カフェ」に参加し、エリック・カールの『パパお月さまとって』、宮沢賢治の『雨ニモマケズ』を朗読した。

同年4月29日には、中原中也記念館前の「空の下の朗読会」に参加して、「街の朗読屋さん」6名が詩の朗読を行った。

同年5月1日には、下関の子ども食堂を訪問し、紙芝居「それいけ！アンパンマン」を上演し、大型絵本の「おおきなかぶ」を子どもたちに読んでもらうなどの活動をした。

同年5月28日には、ハートホーム平川への第4回目の訪問公演を行った。大型絵本の「だるまさんが」「スイミー」「フレデリック」「パパ、おつきさまとって」「かわいそうなぞう」「おおきなかぶ」を会員10名が分担して演じた。なつかしい童謡「いぬのおまわりさん」などを歌う時間を持ったところ好評であった。

同年6月2日には、高齢社会をよくする下関女性の会（代表・田中隆子）の招きで下関市立大学で、紙芝居「金色夜叉」（正・続）と「平和のちかい」を5名で上演した。

同年6月10日には、ケアパートナー防府（デイサービス施設）へ初訪問公演を行った。

同年6月20日のジャススポットポルシェで行われた第6回「やまぐち朗読カフェ」に「街の朗読屋さん」から6名が参加し、谷川俊太郎の「おしっこ」、星野哲郎の『いろはにソラシド』の中の詩「こらどこ向いちょるか」や吉田兼好の『徒然草』、金子みすゞの「竹とんぼ」、覚和歌子の「このたたかいがなかったら」「小さな星」、中原中也の「子守唄よ」などをChifumiさんのピアノ伴奏で朗読した。同日の全体の朗読者は21名であった。

同年6月23日には、山口市後河原の「ギャラリーカフェつるかめ」で「街の朗読屋さん発表会」を行った。会員10名によるこころ温まる大型絵本や紙芝居が上演された。同日は劇団はぐるま座の特別出演として「動けば雷電のごとく」の紙芝居が上演された。

同年6月24日には、山口県立山口図書館での「金子みすゞの詩の魅力～世界に対する独自なまなざし～」に街の朗読屋さんから3名が受講した。

同年7月16日には、下関での金子みすゞの足跡探索を企画し、6名が参加した。同日は田中絹代記念館を訪問し、下関市民会館での「晋作文化祭」にも参加した。

同年7月23日には、ハートホーム平川への第5回目の訪問公演を9名で行った。紙芝居「のばら」「峠の老い桜」や絵本「きつねとぶどう」などを朗読した。

同年8月4日には、山口県立山口図書館第2研修室で「平和を考える紙芝居と絵本＋お話し会」を「街の朗読屋さん」主催で行った。「のばら」「平和のちかい」「峠の老い桜」「父のかお　母のかお」などの紙芝居や「かわいそうなぞう」「おしっこぼうや」「火のカッパ」などの絵本の朗読、沖縄の相良倫子さんの詩「生きる」の群読を行った。当日は、毎日新聞、宇部日報、長周新聞の取材を受け、後日取材記事が掲載された。

同年8月30日にジャススポットポルシェで行われた第7回「やまぐち朗読カフェ」に参加し、朗読した。

同年9月9日には、ケアパートナー防府（デイサービス施設）への第2回目の訪問公演を行った。絵本の「一寸法師」「かわいそうなぞう」「きつねとぶどう」、紙芝居の「みいちゃんの秋」を演じながら、利用者さんと童謡を歌った。

同年9月12日には、下松老人福祉会館での「玉鶴老人大学講座」に招かれて、紙芝居「金色夜叉」「したきりすずめ」「はだかの王さま」「みいちゃんの秋」「鶴柿」を上演した。

同年9月16日には、「ギャラリーカフェつるかめ」において、街の朗読屋さん秋の朗読会を開催した。「一寸法師が後河原

にやってくる！」と題しての朗読会であったが、山口市教育委員会の後援、山口県教育カウンセラー協会との共催で開催することができた。

なお、第一部は、絵本「一寸法師」、紙芝居「こぶとりじいさん」などの上演があり、第二部では、詩集『そこに光があるから』の著者北川暢子氏を招いて、会員9名が詩集の中の詩を朗読した。また、当日の参加者による朗読の時間も持たれた。同日は、「街の朗読屋さん」の卒業生の山田一男氏（90歳）が、埼玉県川越市から駆け付けてくれたので、朗読会の後で卒寿を祝う夕食会がカフェ「おてま」で開かれた。

同年9月17日には、ハートホーム平川への第6回目の訪問公演を行った。絵本の「一寸法師」と「はだかの王さま」を街の朗読屋さん8人で登場人物の役割を決め演劇風に朗読した。紙芝居の「したきりすずめ」と「みいちゃんの秋」を童謡を歌いながら演じた。

同年9月22日、23日、24日および10月21日は、開催中の山口ゆめ花博の「山の外遊びゾーン」においてピクニックデザイン研究所の企画イベントの一つとして「街の朗読屋さん」が加わった。紙芝居の「みいちゃんの秋」「はだかの王さま」、大型紙芝居「おとうさん」、大型絵本「おおきなかぶ」「おじさんのかさ」「キャベツくん」「くじらだ！」「ぐりとぐらのえんそく」「三びきのこぶた」「スイミー」「ぞうのはな」「だるまさんが」「だるまさんと」「だるまさんの」（だるまさんシリーズ）「にじいろのさかな」「どうぞのいす」「はらぺこあおむし」「みんなうんち」「もりのかくれんぼう」などを会員で分担して演じた。朗読マラソンのようであった。

「ぐりとぐらのえんそく」と「三びきのこぶた」は、当日の参加者が朗読した。

それまでは、老人施設の訪問公演が多かったが、山口ゆめ花博では、大勢の幼児や児童が参加してくれたので、大型絵本のレパートリーが広がった。

同年9月29日（土）はクリエイテイブ・スペース「赤れんが」にて写真楽園Club SEIとのコラボで、「やまぐち朗読Cafeスペシャル―写真と言葉―」が開催された。写真展出展者のメッセージの朗読および写真をテーマにした朗読会として実施された。「街の朗読屋さん」のメンバー4人は、アーサービナード（作）・岡村禎志（写真）の『さがしています』（童心社）収録の写真の詩4編の朗読を分担して行なった。

４．問題点と今後の課題・展望

最後に紙芝居や絵本に関する問題点と今後の課題や図書館への提言などを記す。

4－1. 紙芝居やその舞台、大型絵本の貸し出し、活用方法を周知してほしい。

公立の図書館に紙芝居やその舞台、大型絵本が置かれていること自体を知らない人もいる。知っていても、特定の団体でなければ貸し出しできないと思い込んでいる人もいる。中には図書館が団体登録させて、団体にしか紙芝居の舞台を貸し出さないところもあるが、個人で借りられるようにして、もっと紙芝居の活用を促進するようにしてほしい。細かいことになるが、紙芝居の舞台用のケースや袋を用意してくれている図書館もあるが、中には裸で貸し出しているところもある。紙芝居の舞台の保護のためにも、持ち運びの利便性のためにも専用のケースか袋を用意してほしい。

4－2.「高齢者用紙芝居」が自治体の図書館に置かれているが、活用策を考えてほしい。

「高齢者用紙芝居」は、子供向けのコーナー（子ども図書室）に置かれており、「高齢者用紙芝居」が存在すること自体を知らない人も多い。本稿で紹介した「街の朗読屋さん」のように高齢者施設を訪問する団体や個人にもわかるような活用策を考えてほしい。例えば、山梨県立図書館などは、紙芝居の書名、著者、出版社、出版年、内容、対象年齢（目安）、シリーズ、備考などが一覧できるリストを93ページにわたる資料にまとめ公開している。対象年齢（目安）となっているのは、「3･4歳（年少）」となっていても、高齢者が懐かしく喜んで見る場合もあるからであろう。利用枠をきめてしまうというわけではないが、幼児の言語発達と概念形成の観点から、目安があったほうが良い。幼児であっても食い入るように「高齢者用紙芝居」を見ていることもある。そういった場合は、幼児の言語発達と概念形成に寄与していることとなる。知らない言葉でも、紙芝居の絵が意味や概念を示している場合もあり、「教材紙芝居」という機能が期待されるところが大きい。

4－3. 紙芝居や絵本の図書館での配架はタイトル（題名）の五十音順にしてほしい。

多くの公立図書館では、絵本や紙芝居の配架がタイトル（題名）の五十音順ではなく、画家の名前の五十音順になっており、タイトル（題名）で探すのが非常に困難である。子どもたちの視線に立ってみると著者や画家の名前で絵本を探すのではなく、覚えているタイトルで探すと思われる。例えば、『スリランカの昔話　ふしぎな銀の木』という絵本があるが、その本を探す場合、再話と絵の著者のシルビ・ウェッタシンハで探す人はまずいないであろう。ところが、ある図書館では背表紙に「E/ウシ」というラベルがあり、絵本のEはいいとしても、「ウシ」のほうは、「ウェッタシンハ」の「ウ」と「シルビ」の「シ」から取ったと思われる。「ふしぎな銀の木」というタイトルで探している人は「E/フシ」で探しても見つからないので、誰かがかりてい

るのだろうとあきらめてしまうかもしれない。

4－4. 外国人に対する日本語教材の一つとして紙芝居を活用してほしい。

近年、外国人留学生や企業研修生などの増加により、日本に滞在する外国人の数が増えている。日本政府も人手不足の現状から外国人材の受け入れ枠を拡大しようとしている。留学にしろ、研修にしろ、就職にしろ外国人が日本で生活していくためには、日本語の力が必要であり、日本文化や性格習慣など日本事情の理解も必要である。日本語学校や専門学校、短期大学や4年制大学などでも日本語教育が行われているが、それでは間に合わず、全国各地でボランティアの日本語教室も開かれている。日本語教育機関やボランティア教室などでの日本語学習に活用してほしいのが、日本語教材としての役割を果す紙芝居や絵本である。

紙芝居や絵本は、言葉や概念を絵で説明していることが多く、文字情報や母語による翻訳に頼らなくても、言葉や概念を絵を通して理解し、身に着けることができる。

外国語教授法の一つにGDM（段階的直接法：Graded Direct Method）があるが、その特色は、線を使って描かれた絵を使って学ぶやりかたである。名柄迪・茅野直子・中西家栄子（1989）によると、その長所は「絵や動作を使って場面を設定し、学習者の発話を促すので、学習者は自主的に発話ができる」点にある。その短所としては、「専門用語、文学的な表現、主として情緒しか表さない語、単純に他の語でパラフレーズできる語を省くなど、語彙の選択の基準がはっきりしすぎて表現を無味乾燥にする」ことが挙げられている。

紙芝居や絵本は、GDMの長所をもっており、かつ短所としての「文学的な表現、主として情緒しか表さない語」が出てくるので表現の幅を拡張できる。特に擬音語・擬態語などオノマトペの習得に外国人は苦戦しているが、紙芝居や絵本は、よい副教材になり得る。YIC専門学校グループで2017年と2018年に実験的に紙芝居を授業に取り入れて実施したところ、学習意欲を喚起するのに効果が見られた。

紙芝居の「みいちゃんの春」「みいちゃんの夏」「みいちゃんの秋」「みいちゃんの冬」のシリーズは、四季の区分のはっきりしないところからやってきた外国人に、日本の四季を教えるのに適している。例えば、パプアニューギニアなどは一年中夏なので、日本の四季の特色がわかりにくい。さらにこのシリーズは、各季節ごとの童謡が含まれているので、歌を通して日本語を学ぶのにもいい教材となる。（江副・林1986）

前項で触れた「だるまさんが」「だるまさんと」「だるまさんの」（だるまさんシリー

ズ）は、助詞の「が」「と」「の」などを外国人が学ぶのにも活用できる。このシリーズ以外であっても、外国人学習者が、「ひらがな」しか読めない段階でも自分でもひらがなで読める絵本や紙芝居を楽しめる教材として使用できる。

前述のチョン・ヒエウのベトナムの紙芝居「太陽はどこからでるの」やイ・スジンの「アリとバッタとカワセミ」など外国人の手による紙芝居も出されている中で国際理解教育の可能性も含まれているように思われる。

以上4項目の紙芝居や絵本に関する問題点と今後の課題や図書館への提言などについて述べたが、さらに紙芝居や絵本の活用法について以下に示す文献を参考にして、検討していきたい。

［引用文献］

石山幸弘（2008）『紙芝居文化史―資料で読み解く紙芝居の歴史―』萌文書林

江副隆秀・林　伸一編（1986）『外国で日本語を教える』創拓社

紙芝居文化の会（2017）『紙芝居百科』童心社pp. 150－152

名柄迪・茅野直子・中西家栄子（1989）『外国語教育理論の史的発展と日本語教育』アルクpp. 61－68

［紙芝居に関する参考文献］

上地ちづ子・児童図書館研究会（1999）『紙芝居―選び方・生かし方』児童図書館研究会

子どもの文化研究所（2015）『紙芝居入門テキスト・セット①　紙芝居―演じ方のコツと基礎理論のテキスト』一声社

酒井京子・日下部茂子（2003）『図書館ブックレット・あなたにもできる実技編①紙芝居を演じる』図書館流通センター

まついのりこ（2006）『紙芝居の演じ方Q&A』童心社

［絵本に関する参考文献］

湯原公浩編（2006）『別冊太陽　日本のこころ144　絵本屋さんが選んだ絵本100』平凡社

「この本読んで！」編集部（2009）『子どもと読みたい！新しい絵本1000』読書サポート

「この本読んで！」編集部（2018）『子どもと読みたい！新しい絵本1000part2』読書サポート